

あるのは「敬遠」「遠慮」「攻撃」

湯浅さんは、私たちが直面している課題の多くは、多様性のこの側面に由来するのではないかと感じているそうです。この多様性とは、「みんなちがってみんないい」という多様性の考え方です。そこで、このような例を出してこのことを考えています。それは、若い人たちに見られる多様性への身の処し方についてです。この身の処し方が、多様性の側面を象徴していると述べているのです。

たとえば今の大学生は、小さいころから繰り返し、「みんなちがって、みんないい」と聞いてきています。このことは、「違うことを批判してはいけない」「障害者を差別してはいけない」ことを、頭では十分理解してことにつながっています。「みんないい」んだから。存在は肯定的に認めないといけないということです。しかし、そのように考えたうえで、じゃあつきあえるかと言うと、つきあえないし、つきあわないという人が多いというのです。その人の存在は肯定的に認めるのだが、つきあわないし、つきあえないので、共同性というものは生まれてこないのです。むしろ目につくのは「敬遠」と「遠慮」もしくは「攻撃」ではないかというのです。

多様性とは程遠い言葉を想起させているということですが。

私も「みんなちがって、みんないい」という詩のこの一節を特別支援教育や福祉の世界には持ってきてもらいたくないと考えている一人です。この詩は金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」という詩の中に出てくる一節です。この詩は次のような詩です。

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速く走れない。
私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

みんなちがって、みんないいのは、鈴と、小鳥と、人間である私ということですが。このことからどのようなことを湯浅さんは述べるのか、続きにしたいと思います。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。